

第5分科会

研究主題

自ら運動をつくる子どもを育てる体育の学習指導
 - 「考える・やってみる」課題解決活動を通して-

みかさのもり
 大野城市立御笠の森小学校

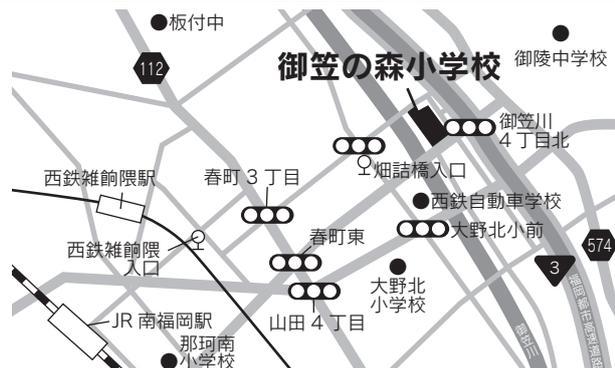
日程

9:00	9:30	10:15	10:30	11:15	11:30	11:45	12:10	13:10	14:20	14:50	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	移動	開会行事	研究発表	昼食	研究協議	指導助言	閉会行事	

公開授業案内

公開授業①	第6学年2組「跳び箱運動」	体育館
公開授業②	第2学年2組「ケロびよんキッズの大冒険」(跳び箱を使った運動遊び)	多目的室
	第4学年1組「育ちゆくわたし」	教室
	第5学年1組「ザ・スポーツ」(表現運動)	体育館

学校所在地図



交通機関

シャトルバス(有料・事前申込)運行
 博多駅(筑紫口)→会場

- 最寄駅
 「南福岡(JR)」下車 徒歩25分(タクシー10分)
- 経路
 博多 発 8:29 8:33 8:40
 ↓JR鹿児島本線
 南福岡 着 8:38 8:41 8:48

学 校 概 要

学 校 名	大野城市立御笠の森小学校		
校 長 名	小 林 剛		
学 級 数	13学級	児 童 数	327名
所 在 地	〒816-0912 大野城市御笠川1丁目7番1号		
連 絡 先	TEL (092) 504-1431 FAX (092) 504-1383 E-mail mikasanomori@bb.csf.ne.jp		

【学校紹介】

本校は、昭和56年度に開校し、本年度で30年目を迎えた学校である。本校の校名「御笠の森」は、神功天皇の笠が風に飛ばされて落ちた森という日本書紀の伝説に由来があり、御笠の森は、学校より南西1kmのところに現存し、この森の名をとって校名がつけられた。

学校は、福岡市と隣接している大野城市の北部に位置し、福岡空港も近く、マンションも多い。

本校は、開校以来30年間、体育科を中心とする健康教育を実施しており、毎朝の裸足でのジョギングや週2回のボール体操（冬季は縄跳び体操）を実施している。また、毎日を半袖・半ズボンの体操服、裸足で生活している。健康教育を推進する日々の実践と着実な授業実践を通じて、心身ともにたくましい児童が育ってきている。

学校の教育目標

21世紀を生き抜く、心身ともに健康で創造性豊かな子どもの育成

<めざす子ども像>

「躍動する子ども」

- 強く、たくましい子ども
- 明るく、助け合う子ども
- よく考え、追究する子ども



<本年度の重点具体目標>

- はつらつと体力づくり
- のびのびと心づくり
- いきいきと学習づくり

研究主題

自ら運動をつくる子どもを育てる体育の学習指導

－「考える・やってみる」課題解決活動を通して－

大野城市立御笠の森小学校

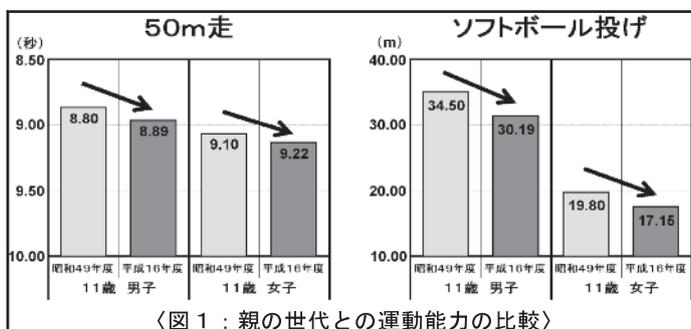
1 主題設定の理由

(1) 大会主題とのかかわりから

本校は、開校以来30年間、健康教育に力を入れてきている。そのかいあって、子どもたちは、大変運動好きで活発であり、休み時間には自ら運動場に出て元気に体を動かす姿がよく見られる。また、裸足の教育によって子どもたちの土踏まずの形成が促進され、毎朝のジョギングによって持久力が高まっている。しかしながら、スポーツテストの結果を全国平均と比べると、シャトルラン以外の項目では特に差はなく、中でもソフトボール投げは劣っていた。子どもたちが遊びや生活の中であまり経験していない動きについては、定着にまで至っていないことがわかった。このような状況は、他の様々な運動種目においても当てはまっている。このような実態から、大会主題で目指す「体育的学力の確かな定着」を図っていくことは不可欠である。特に、本校においては、どの子にも、動きの獲得の仕方や活用の仕方を身に付けさせていく必要があると考えている。そのために、願いや目的に合うように、動きと場を具体的に工夫して高めながら、自ら運動をつくることができるようにしたい。目指す自ら運動をつくる体育の学習は、大会主題にもつながり、意義深いと考える。

(2) 研究の積み上げから

今日の子どもの体力低下の問題は、深刻である。福岡県体育研究所の冊子には、「文部科学省が行っている『体力、運動能力調査』によると、図1のように、親の世代に比べて運動能力が低下していることが分かる」と記されている。このことから、学校現場においては、自ら運動に積極的に取り組んでいくことにより、体力の向上につなげていくことが重要であると考え



〈図1：親の世代との運動能力の比較〉

る。本校は、その問題を解決すべく、小学校期の子どもの特性から、自ら運動をつくる子ども像を明らかにし、目標の共有化を図ってきた。そして、各運動種目において身に付けさせたい動きを系統的に分析しながら、土台となる動きをもとに、内容の重点化も図ってきた。さらに、何事にも好奇心旺盛で追究意欲が高い本校児童の実態を大切にして、「考える・やってみる」ことに着目した追究方法の共通化を図り、効果的に自ら運動をつくる子どもを育てていきたいと考えている。この本校が取り組んでいる内容の重点化と方法の共通化は、本大会で重点を置いている「幼児児童生徒の発達の段階を踏まえること」とも密接に関係しており、意義深いと考える。

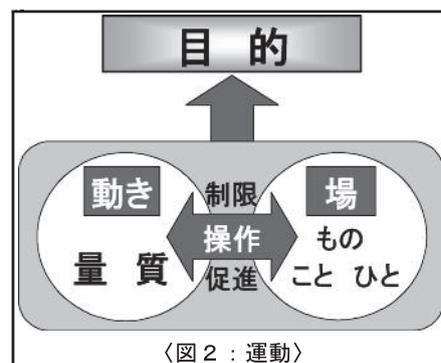
2 主題の意味

(1) 運動について

運動とは、目的に向かって、動きと場を相互関連的に操作することである。

小学校期は、具体操作を通して、知識や技能を、より自ら納得しながら獲得する時期であるの

で、動きと場を互いに関連させながら、目的に向かって、制限したり促進させたりすること（図2）が、重要であると考えられる。目的とは、種目の特性や魅力である克服、達成、競争、模倣・変身のことであり、個人種目の跳び箱運動では「美しく跳び越すこと」、集団種目のバスケットボールでは「チームで相手の守りを崩して攻めること」である。動きとは、方向や長さなど量的なもの、強さやリズムなどの質的なもののことである。場とは、跳び箱、調節板、踏み切り板、箱といった「もの」、0歩着地、5歩助走といった条件の「こと」、ペアの友達、教師といった「ひと」のことである。

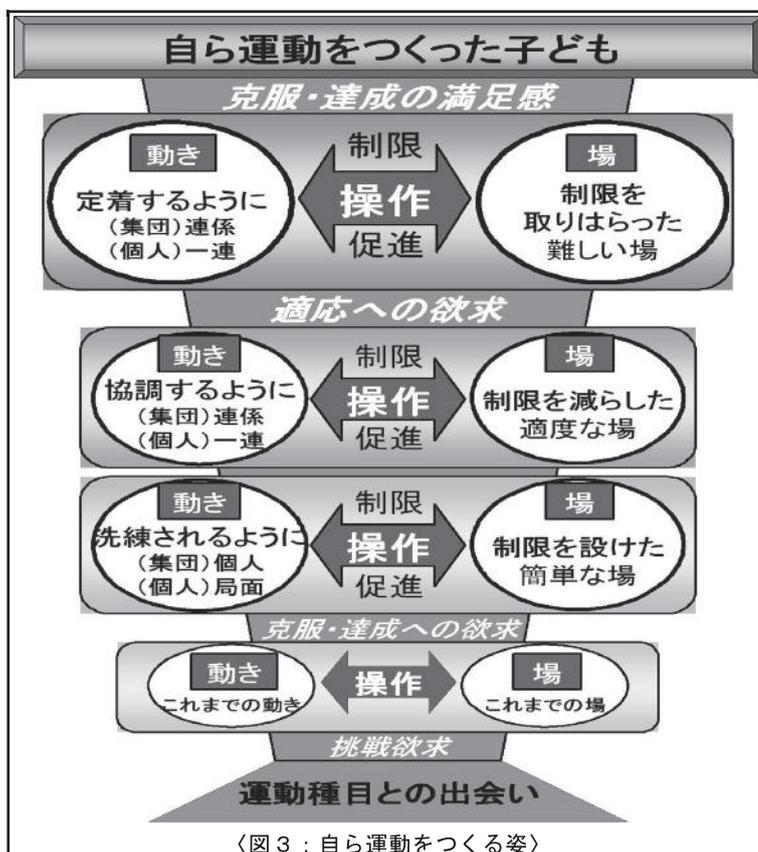


〈図2：運動〉

(2) 自ら運動をつくるについて

自ら運動をつくるとは、目的に向かって動きと場を、意図的、段階的に操作しながら、個のスムーズな一連の動きや集団の連係した動きが、制限を取り除き一連の流れが生じる難しい場でもできるように、自分に合った適切な動きと場を築き上げることであり。

動きについては、個人種目の「走り幅跳び」を例にとると、助走や踏み切りといった各部分が洗練され、それらがつながって協調されることを経て、何回やってもできるスムーズな一連のものへと変容する。それが、集団種目のボール運動では、集団の連係した動きへと変容する。場については、動きの高まりに応じて、制限を多くした簡単なものから制限を減らした難しいものへと変容する。これらの段階的な変容を、図3のように、目的に向かって意図的に行っていくことで、種目本来の楽しさに確実にせまることができると考える。つまり、価値ある主体的な運動になると考える。



〈図3：自ら運動をつくる姿〉

(3) 自ら運動をつくる子どもについて

自分の運動をつくる子どもとは、目的に向かって、自分に合う適切な動きと場を築き上げる過程（前掲図3）で、図4のような資質や能力を身に付けた子どもである。

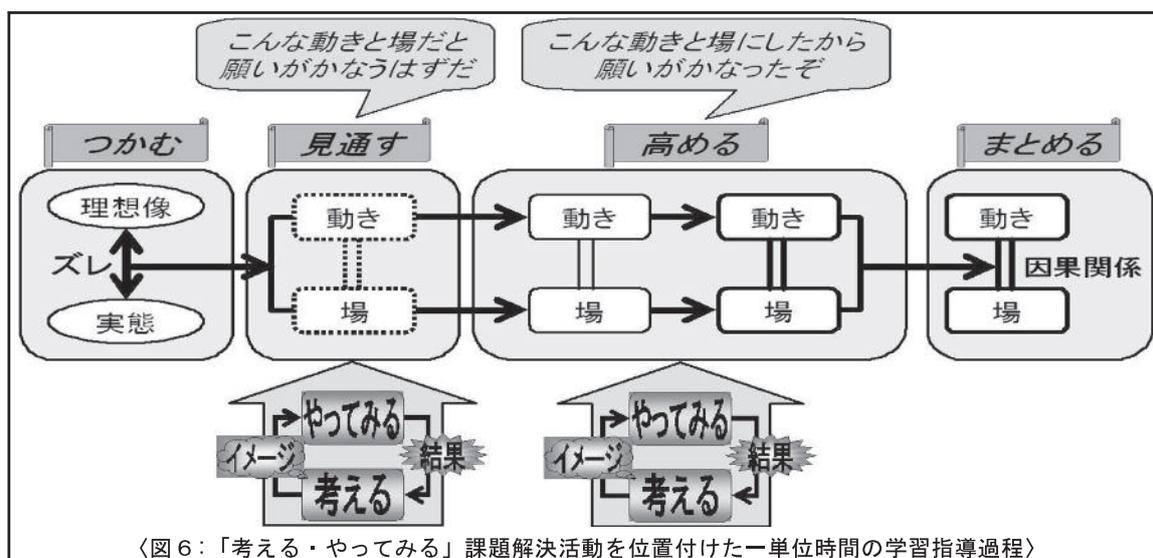
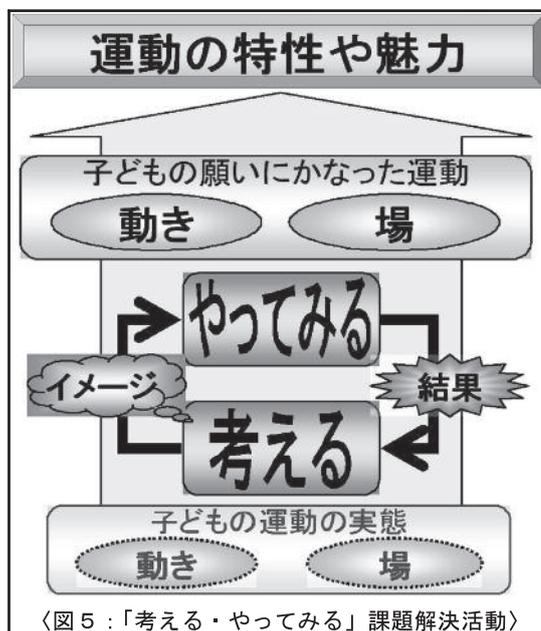
〈図4：目指す子ども像〉

態度	知識、思考・判断	技能
目標を明確にもって、意欲的に自分に合った適切な動きと場をつくりながら、運動本来の楽しさを味わう子ども	目標に向かって、自分に合った適切な動きと場を、意図的に操作してつくりかえる子ども	目標に向かって、各部分の動きを洗練・協調して、スムーズな一連の動きや集団の連係した動きを身に付けた子ども

(4) 「考える・やってみる」課題解決活動について

「考える・やってみる」課題解決活動とは、運動の特性や魅力にせまるための動きと場のイメージを具体的に考えて、実際に繰り返しやってみながら、その結果をもとに課題や高まりをとらえる一単位時間の課題解決活動である。

自ら運動をつくる子どもを育てるためには、前述図3のように、動きと場を段階的に築いていくことが大切である。そのことを具現化するためには、一時間一時間の学習で、確実に動きを高め適切な場を築き上げることが重要である。そこで、一単位時間の課題解決活動に着目していく。子どもの意識が運動の特性や魅力に向かっても、単に体験するだけでは、動きを高めることは困難である。理想と体験したことが「一致」してはじめて、動きの高まりが実感できる。その「一致」をさせるためには、操作するものやことを具体的にイメージして理想への道筋を明確にすることと、明確にしたことを実際にやってみて体験を通しての結果を得ることが大切であり、それらを繰り返すことで価値あるものに高めていくことができると考える（図5）。



また、体育科運動領域では、一単位時間の中で、運動の特性や魅力を味わいたいという子どもの願いに応じて、動きを高め適切な場を築き上げなければならない。そうすることで、単元を通して、種目本来の楽しさを味わったり、種目特有の本質的な動きへと高めたりしていくことができる。したがって、図6のように、一単位時間の学習指導過程の見通す段階と高める段階に、「考える・やってみる」課題解決活動を位置付ける。この一連の「考える・やってみる」課題解決活動は、子どもの実態に応じて、連続発展的に動きと場を高めていくことができるので、研究主題に掲げた「自ら運動をつくる」ことにつながっていると考える。

3 研究の目標

「考える・やってみる」課題解決活動を位置付けた学習指導過程を通して、自ら運動をつくる子どもを育てる体育の学習の在り方を究明する。

4 研究の仮説

体育科運動領域において、「考える・やってみる」課題解決活動を位置付けた学習指導過程を、視点1, 2, 3から具体化すれば、目的に向かって向上心を旺盛にしながら、子どもたちは自ら運動をつくることができるであろう。

〈視点1〉自ら運動をつくる教材化を行う。

〈視点2〉運動を段階的に高める単元構成を工夫する。

〈視点3〉「考える・やってみる」課題解決活動を位置付けた学習指導過程を工夫する。

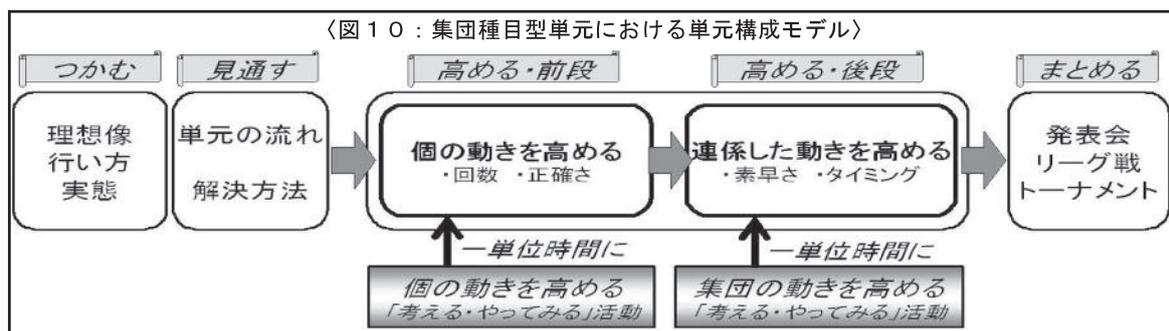
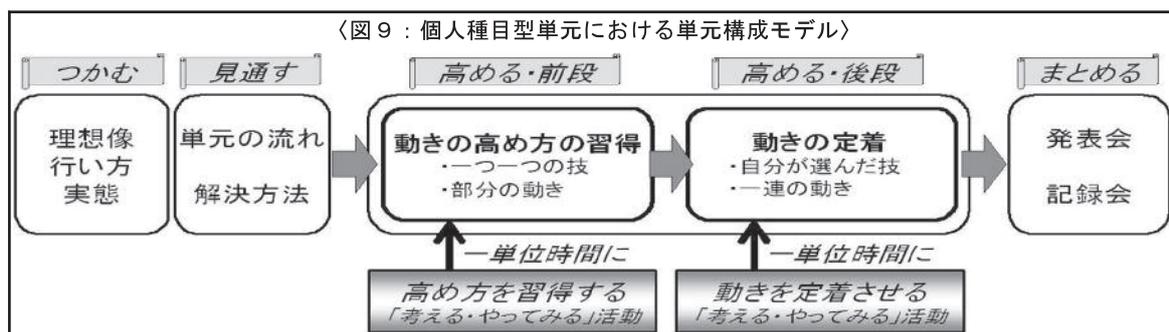
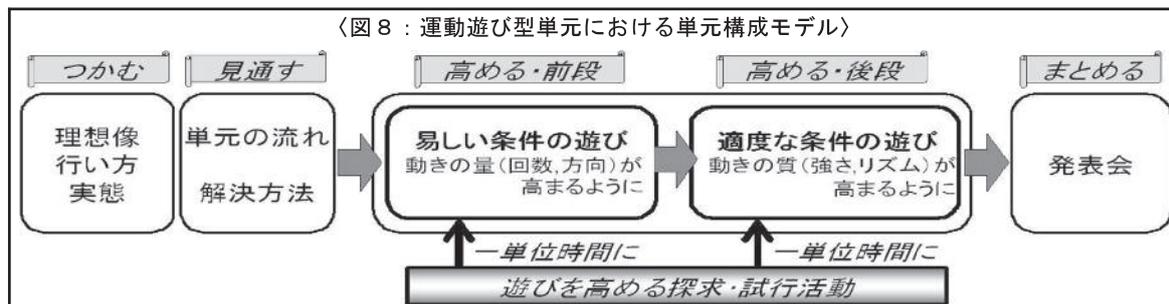
5 具体的な構想

(1) 自ら運動をつくる教材化 〈図7：教材化の観点〉

- 価値性**… 運動遊びや種目本来の楽しさを味わい、願いをかなえることができるように
- 構造的性**… 運動遊びや種目に必要な本質的な動きを身に付けることができるように
- 操作性**… 運動遊びや種目に必要な動きが高まる場や練習を、具体的な操作を通して工夫することができるように

(2) 運動を段階的に高める単元構成

種目がもっている本来の楽しさを味わわせるために、動きと場が段階的に高まるように、単元を構成する。その「高める段階・前段」「高める段階・後段」の一単位時間の中に、必要な動きを確実に獲得することができるように、領域及び種目の特質に応じて、図8, 9, 10に示す「考える・やってみる」課題解決活動を位置付ける。



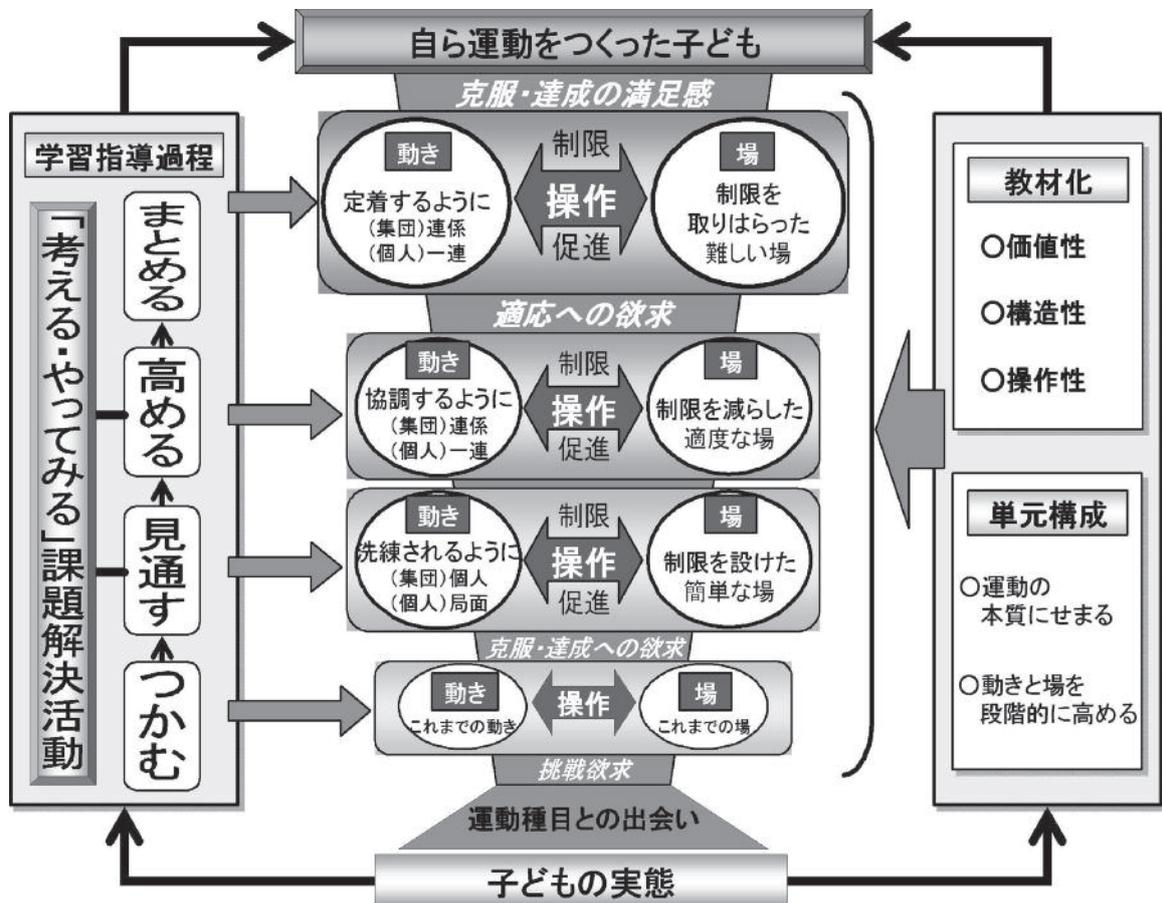
(3) 「考える・やってみる」課題解決活動を位置付けた学習指導過程の工夫

自ら運動をつくるために、一単位時間の「考える・やってみる」課題解決活動を、下記の図11のような目的、内容、方法で行う。

〈図11：「考える・やってみる」課題解決活動の目的、内容、方法〉

段階	つかむ	見通す	高める	まとめる
	「考える・やってみる」課題解決活動			
目的	理想像と実態を把握して、ズレ、不十分さ、期待感から、追究の視点をつかむ。	追究の観点と解決の方法を明らかにし、自分の運動が高まる見通しをもつ。	課題解決につながる視点を意識して、追究対象を繰り返し操作して高める。	自分の実態と追究方法を関係付けて、高まり方の要因を明らかにし、有能感をもつ。
内容	○動き（量，質） ○場（ひと，もの，こと） 高めたい点が明らかになるように	○動き（量，質） ○場（ひと，もの，こと） 高める方向が明らかになるように	○動き（量，質） ○場（ひと，もの，こと） 具体化されるように	○動き（量，質） ○場（ひと，もの，こと） 因果関係が明らかになるように
方法	○理想モデルの提示 ○実態をとらえるデータ化された評価 ○理想モデルと実態の比較による自己評価 ○追究する視点を取り出す全体交流	○動き方の操作 ○場の操作 ○不十分さを明確にし、高まりをとらえたデータによる評価 ○相互評価の結果をもとにした自己評価	○動き方の操作 ○場の操作 ○不十分さを明確にし、高まりをとらえたデータによる評価 ○相互評価の結果をもとにした自己評価	○高まり方の要因を関係付ける自己評価 ○高まり方の要因を明確にする全体交流

(4) 研究構想図



6 実践事例

【実践事例1】 第5学年

(1) 単元 跳び箱運動（器械運動）

(2) 目標

- 跳び箱を安定した動作で跳び越すことに関心をもち、跳び越し方の理想像を共有して友達と意欲的に練習を工夫しながら、跳び箱運動の克服・達成の楽しさを味わう態度を育てる。（態度）
- 跳び箱を安定した動作で跳び越すために、ポイントとなる部分の動きと練習方法（リズムや強さの言語化、調節板・ミニ座布団・ヘディング鈴の操作）を理解し、自分の実態に合わせて練習方法を選んだり練習の場を操作したりすることができるようにする。（思考・判断）
- リズムカルな助走から両足で強く踏み切って台上に上体を投げ出し、着手した両腕で台を強く突き放して体を上方に起こし、膝を曲げて安定した着地をする開脚跳びやかかえ込み跳びをしたり、両手を台の手前に着いて腰を高く跳ね上げ、台上に後頭部・背中・腰を順にゆっくりと着けながらまっすぐ回り、膝を曲げて安定した着地をする台上前転をしたりすることができるようにする。（技能）

(3) 計画（7時間）

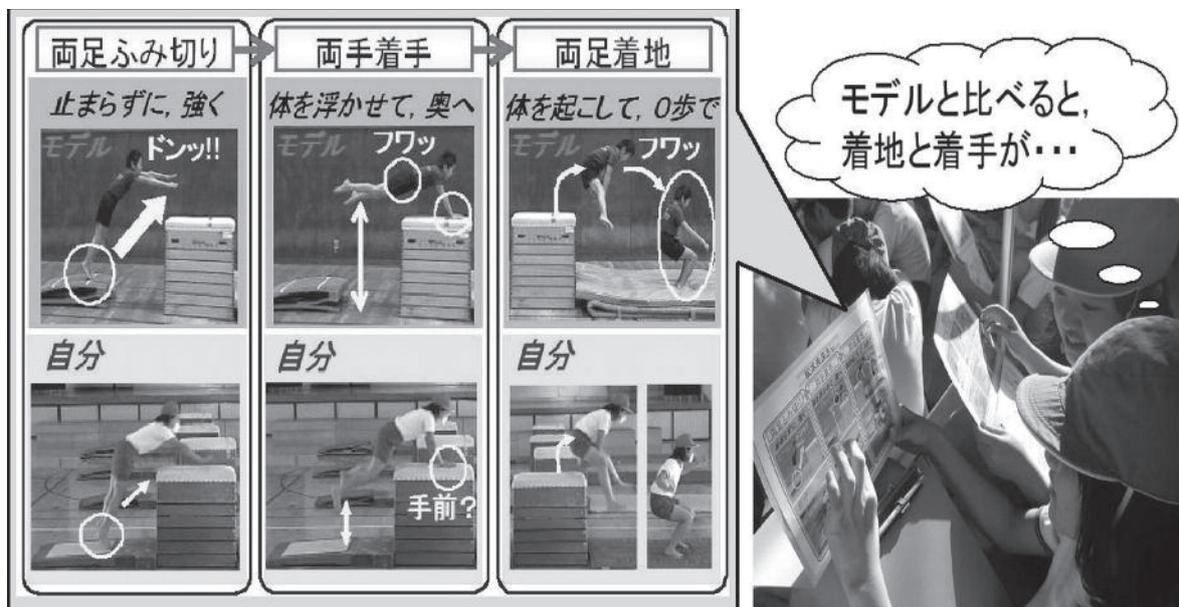
- 1 試しの跳び箱運動を行って、自分の実態をつかみ、学習の見通しをもつ。————— 1
- 2 技の各部分の動きの高め方を習得しながら、技をできるようにする。————— 3
・大きな開脚跳び①（本時） ・安定したかかえ込み跳び① ・安定した台上前転①
- 3 発表する技を決め、不十分な部分を見直ししながら、技を高め定着させる。————— 2
- 4 高めた跳び越し方で、跳び箱運動発表会をする。————— 1

(4) 指導の実際（2／7時）

つかむ段階

〈ねらい〉理想モデルと自分の動きの写真を比較して、自分の動きの不十分さを自覚し、本時学習のめあてをつかむ。

まず、大きな開脚跳びの条件を想起した後、モデルと自分の動きを学習ノートで比較した。比べる観点を3つに絞っていたため、大きな支持跳び越しに向けて、自分の不十分な部分を明確にとらえることができたと考える。



見通す段階

〈ねらい〉 3つの観点から不十分な部分を明確にして、それに合った練習をやりながら、身体操作の仕方を見出す。

次に、掲示物を参考にして自分に合った解決方法を明確にし、ペアと動きを見合いながら、跳び越す練習を繰り返し行った。A児は、着地を安定させるために、自らヘディング鈴の高さや切り返しの方を変えながら練習し、自分の身体操作の仕方を見出していった。操作する観点を明確にして練習したことが、身体操作の仕方を見出すことにつながったと考える。



高める段階

〈ねらい〉 見出した身体操作の仕方を、各部分を高める練習用具を取り除いた場で行って見ながら、一連のスムーズな動きへ適用する。

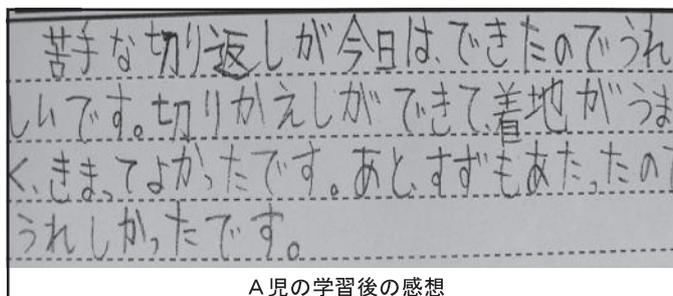
見出した部分の動きを一連のスムーズな動きへと適用することができるよう、練習用具を取り除いた場で、繰り返し跳び越す練習をした。B児は、大きな空間を保ったまま安定した着地をしようと、遅延機能付VTRを観て自分のイメージと実際の動きとのズレを具体的にとらえながら、大きな支持跳び越しへと高めていくことができた。局面を絞ってやったことを即座にフィードバックできる遅延機能付VTRを活用したことが、動きを具体的に高め定着させることに効果的に作用したと考える。



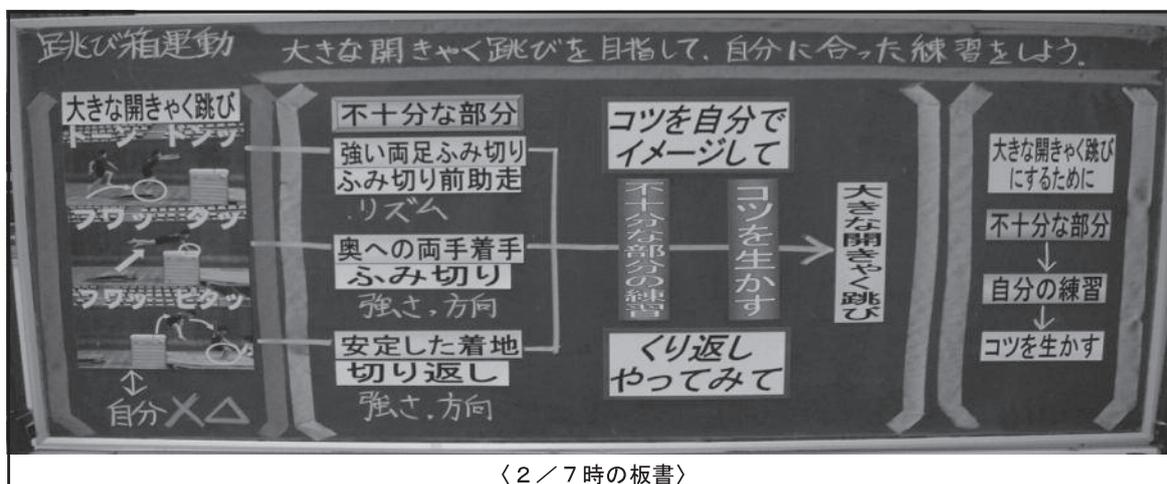
まとめる段階

〈ねらい〉 自分の支持跳び越しの高まりと解決方法のよさを関係付けて、有能感をもつ。

「やってよかった」「自分もやればできる」といった有能感がもてるように、本時の自分の取組を、動きの変容の面と解決方法の面から振り返った。学習ノートの記事に表れているように、自分の支持跳び越しと解決方法を関係付けて、自分の高まりを実感することができた。



A児の学習後の感想



〈2/7時の板書〉

【実践事例2】 第5学年

(1) 単元 「大変だ！の世界」 (表現運動)

(2) 目標

- 身近な生活や自然現象をもとにした題材から表現したいイメージをもって、特徴に合った変化や起伏のある動きを考えて踊ったり、仲間とお互いの表現を見合ったりしながら、即興的な表現の世界にひたって、踊る・創る・観る楽しさを味わうことができるようにする。(態度)
- 表したい感じが強まるように、デフォルメ(動きの誇張)、メリハリ(動きの変化)、ハーモニー(集団での動きの調和)の観点から、踊りを鏡で観たり互いに見合ったりして、自分たちの踊りに工夫を加えながら、工夫することができるようにする。(思考・判断)
- 自分たちの踊りの中で、体の形や表情をデフォルメしたり、速さや強さにメリハリをつけたり、タイミングや並び方を工夫しながら個々の踊りを調和させたりして、表したい感を強めて踊ることができるようにする。(技能)

(3) 計画 (5時間)

- 1 表現主題を知り、踊りながら工夫する観点を取得し、学習の見通しをもつ。————— 1
- 2 表したい感じが強まるように、踊りを工夫して、作品づくりをする。————— 3
 - ・デフォルメを中心に① ・メリハリを中心に① (本時) ・ハーモニーを中心に①
- 3 つくり上げた作品で、「大変だ！の世界」発表会をする。————— 1

(4) 指導の実際 (3/5時)

つかむ段階

〈ねらい〉理想モデルの踊りと自分たちの踊りのVTRを比較して、自分たちの踊りの不十分さを自覚し、本時学習のめあてをつかむ。

まず、理想モデルの踊りを観て、表したい感じを出すために必要な「動きにメリハリをつける観点」を取得した。その観点から前時の自分たちの踊りのVTRを、パソコンで観ることで、不十分な部分を明確にとらえることができた。

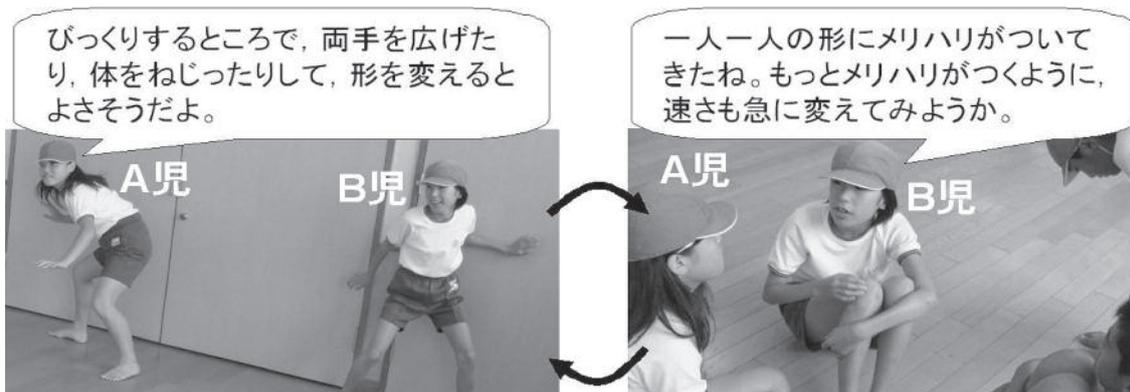
私たちの踊りって、「速さ」と「形」に変化をつけたところが弱いから、思ったより表したい感じが出せていないね。



見通す段階

〈ねらい〉 テーマに合うように、メリハリ（動きの変化）の観点から、実際に踊ったり踊りを見合ったりしながら、一人一人の踊りを修正して、作品へ適用する見通しをもつ。

次に、グループで表したい感じが出するように、メリハリの観点から、一人一人の踊りを修正した。「大変だ!の世界」を「爆弾が落ちてきた、爆発まで30秒!」というテーマで追究しているAグループは、「落ちてきたものが爆弾と気付いて驚く場面」「爆発によって吹き飛ばされる場面」に絞って踊りを修正した。イメージした踊りを実際にやってみたり、踊りを見合っただけに修正を加えたりした。A児とB児は、形を変えること、速さを変えることに着目して、一人一人の踊りを修正することができ、それらを作品へ適用する見通しをもつことができた。



高める段階

〈ねらい〉 テーマに合うように、ハーモニーの観点から、実際に踊ったり踊りを見合ったりしながら、グループの踊りを修正して、作品として高める。

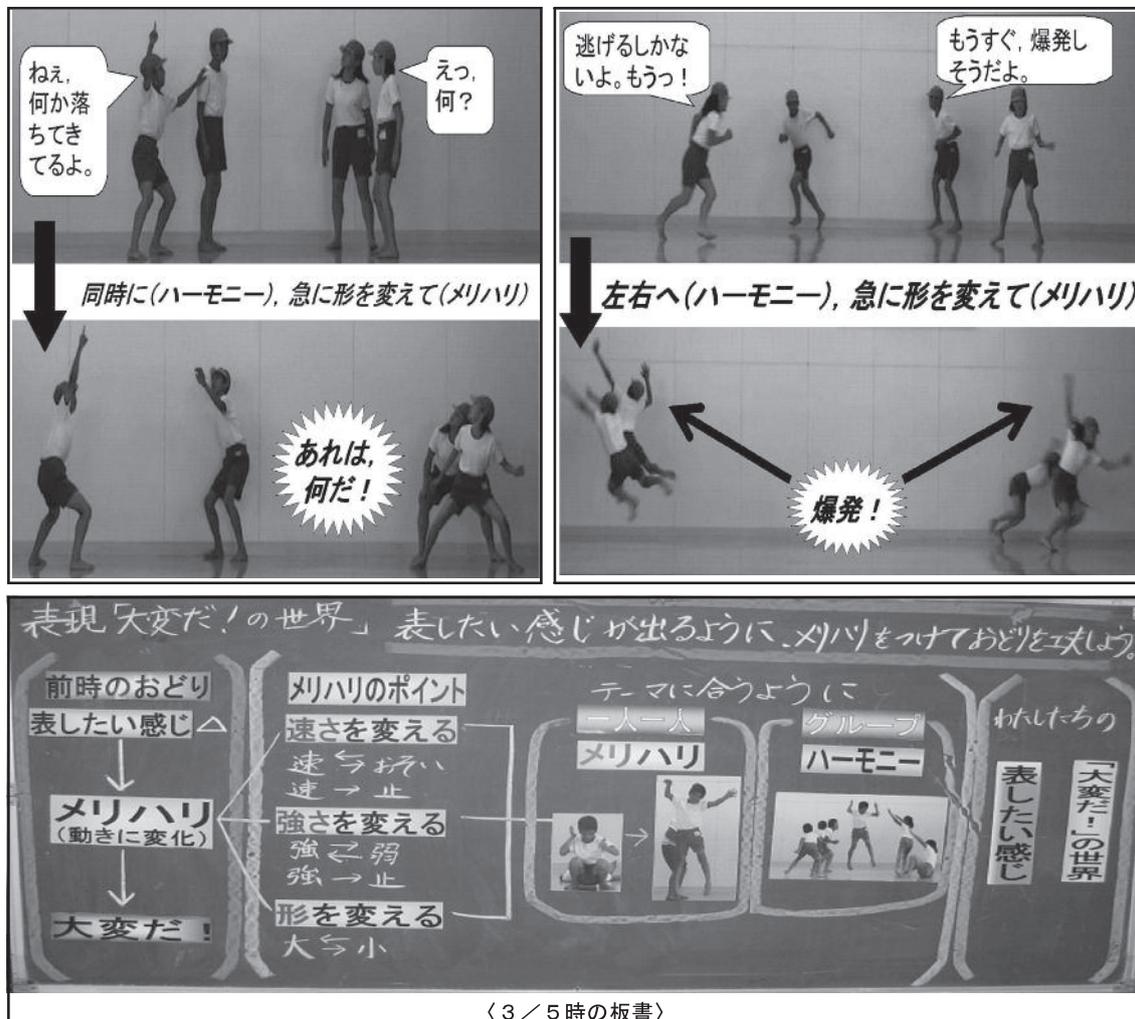
高めた一人一人の踊りを生かして、グループの作品として高めることができるように、ハーモニーの観点（集団の並び方、踊りのタイミング）から、実際に踊って見たり見合ったりしながら繰り返し練習した。Aグループは、動きのメリハリをつけた一人一人の踊りを、ハーモニーの観点から集団に調和させて、作品として高めることができた。



まとめる段階

〈ねらい〉 自分たちの高めた作品を発表し、工夫した点を認め合いながら、有能感をもつ。

「踊るって楽しい」「工夫してよかった」といった有能感がもてるように、本時高めた作品を発表し合い、互いの工夫点を認め合えるようにした。Aグループの子たちは、踊る・創る・観る楽しさを味わい、表したい感じを表出することができた満足感をもつことができていた。



〈3 / 5時の板書〉

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- 体育科運動領域において価値性、構造的、操作性から教材化を行ったことは、子どもたちが運動本来の楽しさを味わいながら、身体能力を協働的、段階的に高めていくことにつながり、自ら運動をつくる子どもにせまる上で有効に働いた。
- 一単位時間に「考える・やってみる」課題解決活動を位置付けたことは、子どもたちが運動の特性や魅力にせまる動きと場のイメージを具体的にもって、高まりや課題をとらえながら自ら繰り返し追究する姿を生み出し、主体的、継続的に身体能力を高める上で有効に働いた。

(2) 課題

- 発達の段階や運動領域に応じたためあての効果的なつかませ方を「期待感をもたせること」「不十分さを自覚させること」「ズレを認識させること」から分類し、導入の仕方や類型化した願いにせまる「考える・やってみる」課題解決活動をさらに工夫し、子どもの追究活動をさらに活発にしていける必要がある。